坂の上通信 特集号

令和五年九月一日
広島市立美鈴が丘高等学校
新聞文芸部（四〇三演習室）

新聞文芸部 全国総文へ

全国139校が鹿児島に集う

7月29日（土）～31日（月）の3日間、鹿児島県鹿児島市で、第47回全国高等学校総合文化祭かごしま大会新聞部門が開催された。我々新聞文芸部から、3年1組三戸夏弥さん、3年4組樫元萌奈さんが出場し、5年連続での出場を果たした。

会場となった志學館大学には、全国から139校の新聞部や新聞委員会が集まった。大学からは鹿児島のシンボルとも言える桜島がみえ、皆の活動を見守る。

大会では、事前に決められたグループで、鹿児島の自然や歴史的・文化的資産に触れたり、そこに生きる人々との交流や取材を通し、新聞を作成する。

初日はグループごとに集まり、自己紹介などの交流が行われた。2日目の午前は開会式、年間紙面審査賞の表彰式が行われた。広島県からは、崇徳高校が最優秀賞、美高は奨励賞を受賞した。午後からは、8つのコースに分かれ、鹿児島の各地で取材をした。取材終了後は会場に戻り、それぞれ担当する記事を作成した。3日目の午前も新聞制作を行い、新聞を作り上げ、昼食後、作成した新聞の講評と閉会式が行われた。

取材で得た膨大な情報を元に、決められた時間内で新聞を作成するのは非常に難しい。どこのグループもなんとか締切に間に合わせようと必死になりながら、全員で協力し、2枚の紙面を完成させていた。

班員と記事について話し合う三戸さん（写真右）

薩摩焼の里 美山

鹿児島県日置市の美山。鹿児島県の伝統工芸品として有名な薩摩焼の里である美山は、420年の歴史を持つ。平成14年に国の伝統工芸品として、経済産業大臣の指定を受けた。

今回は薩摩焼を伝承している沈壽官家の第15代の講演を取材した。沈壽官とは、薩摩焼の陶芸家として、代々受け継がれている家名だ。薩摩焼のような伝統工芸品の生産を担う職人が減っていることに対し、「職人の持つ高い手業を守ったり、見る側が高い審美眼を身につけたりすることで、伝統を守ることに繋がるだろう」と語った。

その後、美山の陶工の末裔であり、太平洋戦争開戦時と終戦時に外務大臣を務めた東郷茂徳の記念館を訪れたり、美山で製作された作品の販売や、陶芸体験、観光案内を行っている美山陶遊館へ訪れた。

優れた文化や伝統が今も受け継がれているのは、守り続けている人たちがいるからである。そのことを忘れずに共に担い手となり、自分たちにできる方法で後世に残していく必要がある。

（三戸夏弥）

西郷隆盛に逢いに

西南戦争と明治維新を追及するべく、鹿児島市加治屋町にある維新ふるさと館と、西郷南洲顕彰館を訪れた。維新ふるさと館では、幕末から明治にかけての歴史の流れを、ロボットや、音や光で多彩な演出が施された映像などをシアターで見られるため、視覚的に深く歴史を知ることができた。館長の佐々木さんは、「大切なのは過去の失敗を省みて、未来の成功へとつなげることです。」と語った。

西郷南洲顕彰館には、西郷隆盛の生い立ちを、ジオラマなどを通して鮮明に描かれており、まるで明治時代にタイムスリップしたよう。明治維新だけではなく、偉人たちを多く生み出した郷中教育や、安政の大獄といった、西郷隆盛が歩んだ歴史を教科書よりも詳しく学ぶことができる。

歴史を学び、過去の先人たちがどんな事をしてきたのかを知ることは、私たちの今と未来を理解し、変えていく事に繋がる。こうした学びの場所を守る必要がある。（樫元萌奈）

感想をどうぞ

3日間たくさんの方と交流していろいろなことを学び、楽しかったです。写真や絵、4コマ漫画などを工夫して取り入れている新聞が多く、大胆で個性があり、見ていて面白かったです。他の学校の新聞に触れる機会はあまりないので、新鮮でした。取材をする中で、他の生徒が積極的に相手に質問をする姿を見て、私も常に積極的に行動するように見習おうと思いました。（三戸夏弥）

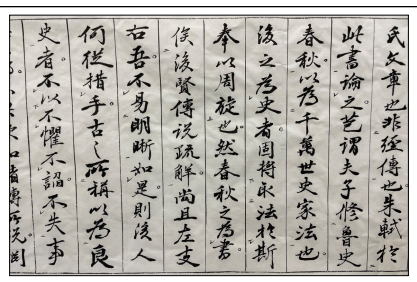
交流新聞制作では、違う都道府県の高校生たちと班を組み、協力して新聞を作ることでいろんな工夫の仕方や取材のやり方などを知ることができ、同時に県ならではのトークで仲良くなることもできたため、とても楽しくて良い経験になりました。ゆるキャラのかごまるもかわいいし、新聞の作り方なども専門家や強豪校の顧問の先生に詳しく教えてもらえて、新聞づくりは面白いことだとさらに実感しました。この経験を日々の生活にも役立てられるよう、これからも頑張りたいです。（樫元萌奈）

書道部も総文出場

全国3位相当の成績

今回の全国総文には、美高から書道部も出場している。書道部は今回が3年連続での出場となる。出場した2年6組竹林美保さんは、大会で読売新聞社賞と奨励賞を受賞するという快挙を成し遂げた。これは全国3位に相当する賞である。竹林さんの作品は、12月25日～27日の間、東京芸術劇場にて開催される、「全国高等学校総合文化祭優秀作品展」で展示される。

竹林さんは、普段の練習について、「自分が毎回、どんな作品を書いているか、振り返り、自分の字の精度を高めた。」と語り、全国総文では、「全国の高校生の作品を見て、自分がどういう所を直したら良いかを学んだ。他の高校の部員もレベルが高かったが、3位までいけて良かった。」と笑顔を見せた。



西畠さんの作品

来年も出場決定 4年連続を記録

7月23日に行われた「広島県高等学校書道連盟席書大会」で、2年5組西畠愛美さんが最優秀賞、2年6組の浦上紗和さんが奨励賞を受賞した。これによって、西畠さんは来年のぎふ総文への出場が決定した。書道部はこれで4年連続の出場を決めた。

西畠さんは、大会に向けての練習で、「とにかく練習して精度を上げることと、同じ字を書き続けるので、気力も必要だった。と語り、「レベルは高かったが、最優秀賞をいただけて嬉しい。今回書いた作品を糧にもっと精度を高めたい」と総文に向けて意気込んだ。

溶岩の上　火山灰との生活

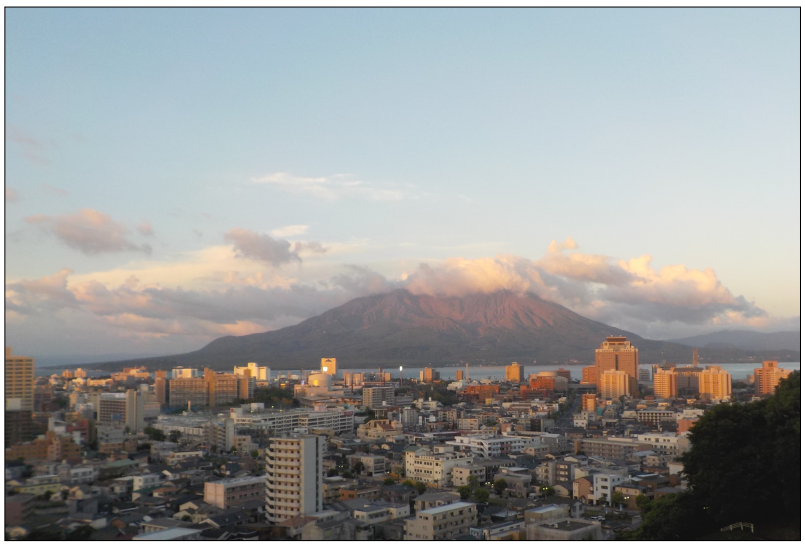
大会終了後、もう一日鹿児島に残り、鹿児島の文化や歴史を探る旅に出た。

まずは王道の桜島。今大会の会場となった志學館大学や、鹿児島市の各取材場所など、どこからでも遠くに桜島が見えており、他にはない雄大さを感じられる。

桜島は、現在も毎日のように小規模噴火を続けているといわれる活火山である。もともとはその名のとおり島だったが、大正時代に起きた大噴火により、陸続きとなった。現在は約３５００人が桜島に暮らしている。

桜島までは本土からフェリーが出ており、島内を一周できる観光バスもある。桜島溶岩なぎさ公園には全長約百メートルの日本最大級の足湯があり、天然温泉が無料で堪能できるなど、活火山の恩恵がうかがえる。

桜島の海岸は砂浜のように砂ではなく、溶岩でできている。ごつごつとした岩でできた海岸は桜島の噴火のすごさをうかがえる。毎日のように噴火しているため、火山灰の被害が絶えず、桜島の住人は天気予報と同じように降灰状況を確認し、家に降り積もった火山灰を処理する為の専用のゴミ袋を確保している。小学生は登下校時ヘルメットをかぶり、大噴火に備えた避難訓練も定期的に行われる。島内には火山灰や火山弾から守る避難壕も設置されており、日常の中に噴火の脅威があることがわかる。それでも桜島に住み続ける住民。桜島にはそれだけの魅力と愛があるのだろう。


会場の志學館大学から見える雄大な桜島

火山灰専用の黄色いゴミ袋

溶岩でできた海岸

こんなにある　鹿児島フード

しろくまアイス

全国的に有名な「しろくまアイス」は鹿児島発祥。カップアイスのイメージとは違い、鹿児島ではかき氷に練乳やフルーツをトッピングしたものを指す。広島でも食べられるしろくまアイスはそれを凍らせたものなのだ。

黒豚

鹿児島の名産品として有名な黒豚。黒豚とは、バークシャー種という、黒い毛で全身が覆われた豚の肉のことを指す。我々はとんかつを頂いたが、柔らかく口に入れると溶けるような食感が特徴的でとてもおいしかった。

鹿児島ラーメン

鹿児島ラーメンのベースとなる豚とろが絶品の一品だ。はとんこつである。豚一頭からわずかしかとれない豚とろを利用したチャーシューをのせる場合が多く、口の中でとろけ、甘みがあるのが特徴である。昔から保存食として漬け物にされ、食べられることが多い。

桜島大根

桜島大根は、ギネスブックにも認定された、世界最大の大根である。形状は一般的な大根のように細長くはなく、かぶに近い。重いものだと３０キロ以上にもなる。栽培は桜島島外でも行われており、桜島出身の長渕剛も親しんだことで知られる。

「やぶ金」のうどん

桜島フェリーの中には「やぶ金」といううどん屋さんがある。利用客は、桜島へ渡る15分の間で食べきるのだが、県民のソウルフードとして、その珍しい光景と共に有名である。

ぢゃんぼ餅

漢字で書くと「両棒餅」であり、大きいからジャンボ餅、というわけではない。平べったいお餅に竹串を二本刺したみたらし団子のようなもので、江戸時代から愛される郷土菓子である。鹿児島出身の長渕剛も親しんだことで知られる。

黒潮に棲む生き物たち

桜島フェリー乗り場に隣接する「いおワールドかごしま水族館」には、日本でも数少ないジンベエザメを中心に、約800種類の生き物が展示されている。鹿児島県の海は黒潮の通り道になっており、温帯から亜熱帯の多様な海洋生物が生息しているため、黒潮に棲む生き物を中心に展示がされている。

薩摩半島と大隈半島にかこまれた錦江湾の海底火山付近で、「サツマハオリムシ」という新種が発見され、これもかごしま水族館の名物展示の一つだ。深海に生息するハオリムシの生体展示は、世界初である。

サツマハオリムシの展示

ハオリムシはチューブワームとも呼ばれ、口や肛門といった消化器官を持たず、先端のハオリから硫化水素を取り込み、体内の硫黄細菌に供給し、そこで得られた有機物に依存して生きている。このように体内の細菌と共生する生物であり、硫化水素を得られやすい深海の海底火山や熱水噴出孔の近くに生息することが多い。そのため、サツマハオリムシも、活火山である桜島付近に生息しているのである。また、サツマハオリムシのハオリ部は相対的に短い。

硫化ナトリウムを飼育海水に注入し、硫化水素を発生させる方法で飼育されている。

水族館の看板・ジンベエザメ

ぎふ大会　出場なるか

全国高等学校総合文化祭も、今年で第47回を迎え、47都道府県を一周した。来年は岐阜県で開催されることが決まっており、ここからは2周目に入る。

近年では、コロナ禍の影響を大きく受けた全国総文。新聞文芸部が初出場した２０２０年の「さが総文」から五年連続での出場を決めているが、現地に行けたのは4回。二回目の出場となった２０２１年の「こうち総文」は、新型コロナウイルスが猛威を振るい、WEB開催となったのだ。この年は様々な部活動で、夏の大会等が中止・延期となり、多くの学生から悲痛の声が漏れた年でもあった。

美高の新聞文芸部は何度も全国の舞台へ出場を決めている、いわば強豪校なのだが、長年部員不足に悩まされ、何度も廃部の危機に陥っている。それは、美高に限らず、他の高校の新聞部も同じである。

広島県には高校文化連盟の新聞専門部があり、これまではそこで主催される新聞コンクールに入賞することで、全国総文への出場を決めてきた。しかし、そういった各校の状況をうけ、現在新聞専門部の活動が休止している。今年はコンクール自体の開催が未定であり、チャンスを失った状態。残る希望は、全国高校新聞年間紙面審査賞への入賞。これは全国の高校との戦いであり、広島県には崇徳高校という部員を百名以上抱える強豪校が存在するため、ハードルがとても高い。本号をもって3年生は引退、残る部員は1年生2名となる我々にとって、来年のぎふ総文への出場はかなり厳しい状況に置かれている。

全国総文への出場を目指し、懸命に活動を続けてきた新聞文芸部。6年連続での出場に向けて、かごしま大会で学んだ技術を活かしながら、新入部員の入部を心待ちにしている。

閉会式での引き継ぎの様子

鹿児島と広島に流れる平和への願い

「必中必死」に隠れた本音

かごしま総文閉会後、研修取材で南北九州市にある知覧特攻平和会館を訪れた。ここには、第二次世界大戦末期の沖縄戦で、爆装した飛行機とともに敵艦に体当たりした陸軍特別特攻隊の遺影、遺品等を展示してある。

17歳といった若い特攻隊員をはじめ、１０３６名が九州や沖縄などから飛び立ったが、知覧からは439名と最多であった。

館内のビデオ映像では、食堂で彼らから母親の様に慕われたトメさんが「みんな可愛くて全員自分のうちの子供にしたかった」と語っていたり、館内には薩摩富士の写真もあるなど、彼らが見た最後の景色と言える展示がいくつもある。ほかにも、隊員たちにとって心の支えとなった、女子学生から特攻隊員に送られたマスコット人形や、燃える機体から天女たちが隊員の魂を救い出している様子を描かれた絵、知覧鎮魂の賦、戦闘機の模型などが展示してある。

その中でも目を引くのは、隊員たちが別れを悟った上で、家族や恋人など、大切な人へに宛ててつづった遺書である。穴澤隊員は、恋人に向けて「会ひたい　話したい　無性に」と、久野隊員は「父ハスガタコソミエザルモ　イツデモオマヘタチヲ見テイル。」と、幼く、漢字の読めないわが子たちへカタカナで想いをつづった。

また、「必中」「必死」と大きく書かれた手ぬぐいや旗も展示されている。「必ずあたり「必ず死」んででも、敵艦に突撃する。その思いの裏には、表に出すことができなかった大切な人への想いがある。

今を生きる私たちと同じような想いを抱えながらも、死を覚悟していた若者がいたという事実と、それがいかに残酷かを忘れないようにしたい。

そして、広島では、その覚悟もできないまま、亡くなっていった人々が大勢いたことを痛感した。両県に流れる平和への想いは、同じである。

海から引き上げられた零式戦闘機

広島を知って欲しい

戦前の広島も写真で展示

西区にある泉美術館では、6月17日（土）から8月27日（日）まで特別展「広島の記憶」が開催されている。この特別展を企画したNPO法人広島写真保存活用の会」の松浦康高さんにお話を伺った。

展示の説明をする渡辺さん

戦前から戦後までの広島に着目しているこの特別展。絵葉書や写真、絵画などの展示品から、戦争へと向かっていった広島の様子がうかがえる。

戦前の写真は原爆で焼失しあまり残っていない。風景写真も今のように自由にとれなかった戦前を知る手がかりになるのは、絵葉書である。広島みやげとして全国に広がった絵葉書は、広島が被爆した後も生き残り、被爆前の広島を記録する貴重な資料となった。また、四國五郎の作品に、戦前の広島の街並みを描いたものがある。『鶴見橋・水泳』には、京橋川で泳ぐ大勢の子供達の姿が描かれており、松浦さんは「声が聞こえてきそう」と言う。

情報統制が厳しくなった戦後、アメリカの写真グラフ雑誌『LIFE』１９５２年9月29日号では、初めて検閲なしの記事が公開された。それまでにも１９４５年8月20日号では原爆の威力に関する写真や記事が掲載されているが、原爆を受けた人々の様子を伝えられたのは、その7年後だ。写真の鬼と呼ばれた土門拳も、原爆が投下された12年後に広島へ行き、そこで初めて人体にも原爆の跡が生きていることを知った。それだけ、日本でもアメリカでも、原爆の実態を知らされていなかったのである。原爆投下は戦争を終わらせるための手段であり、放射能は広島に残っていないとアメリカは主張していた。国内外からの非難を恐れ、原爆による人体への被害の公表を制限していたのだ。

土門拳の資料展示

人体への被害はやけどだけでなく、白血病などの原爆症で今でも苦しんでいる人がいる。松浦さんは、「私は、被爆後の広島が立ち上がる姿に焦点を当てた企画を5、6回してきましたが、戦前、そこには当たり前の日常があったということ、それが戦争の渦中で失われていったということを知るためには、もっと深掘りをする必要があると考えました。そこから、人々が知らない、知らされていない広島を伝えるために資料を集めていき、今回の特別展の開催に繋がりました。」「後世に渡していくためにも、大切な記録から、日時や場所など正確な情報が読み取れるよう、資料を整理して残すべきです。また、先人たちが守り抜いた資料に触れ、知ろうとすることも大事です。」と語った。

質問に答える近藤さん

自分にできることを

8月29日（土）、泉美術館で近藤紘子さんによるトークイベントとひろしま音読の会による朗読が行われた。

近藤さんは生後8ヶ月のときに、爆心地から約1.1キロの地点で被爆した。１９５５年に近藤さんは、B29の副操縦士であったロバート・ルイスに出会う。あの日から原爆を落とした相手に対し、憎しみの気持ちを持って生きてきたが、相手の事を知らないのに憎んでいたことに、ルイスに出会って気づく。彼に出会わなければいつまでも相手が悪いと思っていただろう。近藤さんはそう語る。

近藤さんの父である谷本清さんは牧師であり、アメリカで講演を行ったり被爆した女性や孤児の救済活動を行ったりしていた。被爆者のために役に立ちたいという思いと、「たすけて」という声を振り切り家族を探したこと、一家全員が奇跡的に助かったことへの後悔と罪悪感があったからだという。谷本さんは「人から人へ話すことによって、時間はかかるかもしれないが、だんだん大きくなる」。そう語っていたそうだ。

戦後78年が経つが、いまだに世界には核が存在している。平和への思いは、確かに人から人へつながれているはずだ。近藤さんは、「地球上にいる子供は全員大事で、とにかく戦争はしてはいけない」と、8月6日に着せられていた服を握り締めながら語った。また、私たち若い世代には、「与えられた命を最後まで生きて欲しい。そして、平和のために、未来のために、自分にできることをやって欲しい。」と語った

「はだしのゲン」全10巻寄贈

7月上旬、美鈴が丘高校の図書館に、「はだしのゲン」全10巻が、元市議会議員の馬庭恭子さんから寄贈された。美高だけではなく、他の広島市小中学や高校にも寄贈がされている。

馬庭さんは、市議の任期中に支払われる、本議会などに出席した際の交通費や日当を、「議員報酬だけで十分」といって、受け取りを拒否していた。今回の寄贈にはそのお金があてがわれているそうだ。

美高の図書館では、夏の間平和図書コーナーを設けている。寄贈された「はだしのゲン」は、早速コーナーに並んだ。

怖いから撤去？

「はだしのゲン」は、過激なシーンが多い等の理由で、数年前から学校図書館の書架から取り除かれたことでも話題となっている。広島平和記念資料館に展示してあった被爆再現人形も、「怖い」という声が多く寄せられ今は撤去されるなど、「怖い」という理由から被爆資料が敬遠されている傾向にある。

しかし、この人形の撤去が決まった主な理由は、被害のイメージが一元化しないようにするためであった。被爆者の高齢化が進み、被爆の記憶が薄れていくことが懸念される中で、人形よりももっとひどい被害を受けた人たちがいた事実も忘れられ、人形によって受けたイメージが一人歩きする恐れがあった。資料館のリニューアル後は、実物展示を中心に、被爆の実態に迫る内容となっている。

美高図書館の平和図書コーナー

被爆の悲惨さを物語る貴重な資料が、「過激」「怖い」という理由でなくなることはあってはならない。むしろ、イメージがつかみにくい現代だからこそ、心に強く残るものの存在価値は高い。それと同時に、一部の資料だけを鵜呑みにせず、様々な資料を用いて、偏ったイメージを持たないよう正しく理解することが、戦争を後世へ伝なければいけない私たちにとって重要なので

新聞文芸部

廃部の危機を救え！

映えスポットで写真を撮る部員たち

残る部員は２名

本号の発行ををもって、引退となった新聞文芸部の３年生２名。これにて、部員は１年生２名となった。

我々新聞文芸部は、全国総文に五年連続で出場しているほどの強豪校でありながら、長年部員不足に悩まされている。

活動内容は、月に１～２度の、校内新聞「坂の上通信」の発行である。**週１回**行われる編集会議（ミーティング）で、新聞のテーマを決定し、カメラとメモ帳を手に取材を行う。取材結果を原稿に起こしたら顧問の先生に添削をしていただき、原稿をＰＣに入力したら完成。取材は、自分や相手の都合が付くときに行うため、**勉強との両立も可能**。**兼部**していた部員も過去何人もいた。また、取材は校内だけにとどまらず、地域の方へ取材をしたり、開催されているイベントでの取材をしたりもした。

文章力に自信が無くても、顧問の先生に細かく添削をしてもらえるので安心だ。また、何度も記事を書けば自然と文章力も身についてくる。国語の成績を上げたい方、小論文対策をしたい方にはもってこいの部活である。また、取材を通して**コミュニケーション能力**も高めることができる。相手に失礼がないように、言動に注意しながら、相手の話を掘り下げ、言葉を引き出すという、高等な話術を、新聞文芸部で鍛えることができる。これから社会に出ていく私たちにとって必要な技術を自然と身につけることができ、友達ももっと増えることだろう。

紙面ができるまでには、写真撮影、記事起こし、レイアウト決め、見出し決めと、様々な工程を踏むので、意外と人手が必要だ。このままでは「坂の上通信」のこれまでどおりの発行は難しい。少しでも興味のある方はすぐに入部し、我々と共に青春を送ろう。連絡は担任の先生か、顧問の国語科・小畑まで。

３年生からのメッセージ

わたしは、去年の坂の上通信で部員を募集していることを知って、何か部活に入りたいなと思っていたので入部を決めました。

記事の執筆を通して、いいまわしや文章の接続の表現の幅が広がり、文章力をつけることができました。元々人と話すのはあまり好きではなかったけれど、先生や先輩・後輩をはじめ、さまざまな年代の人と話したので、今では抵抗もなくなりました。入部して良かったことは他にも沢山あって語り尽くせません。とても楽しかったです。

１年生からのメッセージ

僕は、小畑先生からの勧誘で入部しました。運動部に入っていますが、文化部も体験したかったので、活動日が水曜日で、兼部もできることが魅力でした。

人数は少ないですが、先輩も先生も、話しやすい雰囲気で、堅苦しくないし、明るい雰囲気があるので、コミュニケーションが苦手でも安心できます。新聞を書くということで、文章力もつくし、なかなかできない経験だと思うので、きっと楽しめると思います。

女子でも男子でも、是非入部してください。

写真がたくさんとれる！

新聞には、より分かりやすく状況を伝えるためにも、写真が欠かせない。

学校行事では、部費で購入したカメラを片手に動き回り、時にはなかなか見れない舞台裏まで入れることもある。

わが校には写真部がないので、写真が趣味な方にはうってつけの部活だ。

写真撮影中の部員

四コマ漫画が描ける！

他校の学校新聞の四コマ漫画

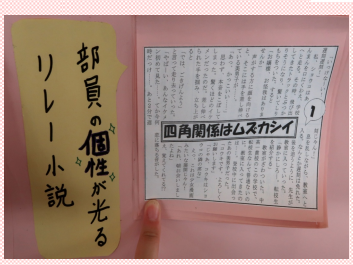
絵が得意な方は、新聞にはおなじみの、四コマ漫画を描いてみるのはどうだろうか。

全国総文で展示されていたほかの学校の新聞では、四コマ漫画を連載している学校も多くあり、目立っていた。

典型的な学校新聞である「坂の上通信」の魅力化に、ぜひ協力をお願いしたい。

連載小説が書ける！

我々は新聞「文芸」部である。しかし、文芸部らしい活動はここ最近行っていない。小説を読むのが好きな方は、一度は自分も物語を書いてみたいと思ったことがあるのではないだろうか。そんな方は「坂の上通信」で、連載小説を書いてみるのはどうだろう。若い作家を待っている。



他校の連載小説

修学旅行限定の記者も募集

現在部員は１年生のみ。２年生の部員がいないため、このままでは修学旅行の記事を描くことができない。

そこで、新聞文芸部では、修学旅行時のみ取材に協力していただける２年生を募集している。活動内容は、修学旅行中に写真をとり、体験したことを記事に起こすなどだ。もちろん、修学旅行が終わった後も、そのまま入部してかまわない。

友達と一緒に参加ＯＫ。気になった方は国語科・小畑まで。

美・鈴・鈴・鈴

今回新聞文芸部が参加した文化部のインターハイ、全国総文。開催部門は全部で二十五種類あり、小倉百人一首かるたや郷土芸能など多種多様である。▼来年の総文の舞台となる岐阜県。テーマは「集え青き春　漕ぎ出せ知の筏　水面煌めく清流の国へ」と、木曽川、長良川、揖斐川といった美しい川を持つ岐阜県らしいものとなっている。▼岐阜県には、モネの池や白川郷、岐阜城といった誰しも一回は聞いたことのある自然豊かなスポットが満載だ。また、大ヒット映画「君の名は」の舞台としても有名で、日枝神社や飛騨古川駅など、聖地巡礼に訪れる観光客が後を絶たない。高山ラーメンや五平餅などグルメも豊富で、想像よりも魅力の溢れた場所である。▼今年の秋に行われる年間紙面審査賞での入賞を目指し、新聞文芸部は日々邁進中。魅力たっぷりの岐阜県に行くために、魅力たっぷりの新聞文芸部に入って、新聞作りしませんか。

（樫元萌奈）

編集後記

充実した夏休みになりました。あなたも新聞文芸部で青春しませんか。